

資料 2

「私、時夫のこと好きになったから…。ずっと一緒にいたいから、そのためにお互いのことよく知っておきたかった。エイズ検査もその一つだと思ったから…。

実は、ロンドンに留学していた時、そこで通っていたハイスクールのクラスメイトの女の子がエイズで亡くなったの。数年前付き合っていたボーイフレンドからうつされたらしいんだけど、年は6つ上で、私とは生まれ育った国も違うけど趣味や考え方がとっても似ていて…。

もちろん、私はエイズのことは知識として知ってはいたけどまさか、そんな身近な病気だとは思ってもいなかった。彼女に日本のことを話したら、すっごく日本に来たがっていた。このペンダントはその女の子からのプレゼントなの…。

私も、エイズ検査を受けたことはないわ……。もし、私がエイズだったら、時夫にうつしてしまうかもしれない」

「…」

時夫は、言葉を無くしたが、しばらくして、「ごめん、わかったよ」

※北村邦夫著「カラダの本」講談社 第3章をもとに改作

資料 3

「いい人生をおくろうよ」

北村邦夫（日本家族計画協会クリニック所長）

「エイズ予防にコンドーム」というメッセージに僕は、「どうかな」と思っている。「コンドームを使えばエイズにならない」と叫んだところで、本当に使えるかという疑問が残る。たとえば、男性が、「おれ、これ使うからな」とコンドームを差し出したとしよう。その時、彼女が、「今日は妊娠しない日だから、つけなくても心配ないわよ」と返されたらどうだ。それでも「使うことがおれの責任」と言えるのか。それでも使いとおそうとすれば、こう責められるのが落ちだろう。「まさか、私が病気を持っているとも思っているの」と…。

この疑問に解答を与えてくれた若いカップルに最近出会った。以来僕は、エイズ時代に素敵な恋を実現しようという、トレンドリーなカップルが続々とクリニックを訪れることを心待ちにしている。

大学一年の同級生だという二人は、HIV抗体の検査（エイズ検査）をしたいと言ってやって来た。彼女の方は中学生のころから月経の異常があってクリニックに来ていた患者だった。僕は彼ら一人ひとりを診察室に招いてこうたずねた。「セックスの経験はあるのか」と。二人ともに、「ない」と明快に答えた。

セックスの経験のない二人がどうして、 検査をする必要があるのだろう。

彼女は、こう言うのだ。「愛してるという言葉では、エイズには勝てない」セックスを考えた頃から、確かに彼から自分に向けての愛しているという言葉が多くなった。でも、愛していると言った彼が性感染症（エイズも含めた性交渉による感染症）を持っていないという保証はない。愛しているから、確実な避妊ができるとも言えない。セックスの経験があるとかないとかは、どんなに親しい関係でも、語ることをためらうことが少なくないし、むしろ、セックスの経験があったなどとは聞きたくない二人がいる限りは、検査は絶対に必要なのだ。

彼女の言葉もふるっていた。

「私が好きになった彼との出会いは、身近なところで、魅力的に輝いていた彼がいたということです。どうして輝いていたかって？別に私が現れたことで、突然輝きを増したなどと大それたことは申しません。この世に誕生してから私との出会いまでに、大勢の方々と触れ合いや学びがあったはずでしょ。親や兄弟や友人や教師や……。友人の中には同性も異性もいて、ひょっとしたらセックスだってあったかもしれない。でも、その過去を否定したら、今の彼は無いわけだし。他の女性との関係があったとしたら、悔しいけれど、その彼を好きになったのですから」

彼の過去を素直に受容するとはいえ、過去の遺産である性感染症を引き継ぐことだけは、嫌だという彼女の強い意志を見た思いがした。

いいセックスを実現しようとした二人の検査結果は当然ながら陰性（感染していない）。だから二人の間にはH I Vのやりとりはない。もちろん相手は検査結果によって選ぶわけではないから、陽性（感染している）であることがあらかじめわかっていたら、コンドームなしのセックスをする人などいない。

そこに愛があるならば。そこに責任と思いやりがあったら……………。

いいセックスは、このカップルのような自覚と行動力によっては十分に可能だということを、僕は君たちに語りたかった。「コンドームを使えば大丈夫だ」ではなくて、コンドームを使う前に、服を脱ぐ前に、二人でセックスについて真剣に語り合える関係を築くことが大事なのだ。夢にまでみたセックスの直後から、望まない妊娠不安に陥ったり、エイズ不安で苦しむなんてナンセンスだ。

なんでも語り合える素敵なパートナー選びができるように。
いい人生を送るんだよ。

以上 北村邦夫著 「カラダの本」 講談社より